

# COSMOS集



空がひろがる

杉本 なお 静岡  
「あすなる集」特選

幾たびも通りし道の木の陰に知らざる古き細道のあり  
落雷に折れたる枝の数本分あをき五月の空がひろがる  
皮に毛をびつしり生やしたけのこがるのししの子のやうに太れり  
七本で七・五キロのたけのこを体重計からしづかにおろす  
ほんのりと酔ひたる夜を語り合ふ空中都市に暮らす計画

根をはれ

星野 尚 子\*新潟

こんなにも近くにいるのに不協和音あなたはドレミわたしはドレファ  
初心者マークを見守るかのように車体に舞った桜ひらひら  
三密を避けよと電光掲示板向こうにサーツと虹がかかった  
子供らの見えない底力を信じ…今は根をはれ深く深くはれ  
ストレスに打ちのめされず生きてゆく術はひとりじゃないと知ること

どんたくのジंकクス

手嶋 千 尋\*福岡

非常時のビュロクラシーあぶりだす怪獣映画に現実が似る

どんたくのジंकクスへ必ず雨が降るどんたく中止の今年も雨降り  
一之輔の胸のあたりでへくるくるが 生配信は途切れそうになる  
巣ごもりの巣は三角形パソコンとラジオと本のまん中にいる  
フェルメールの青いパレット広がりぬポーチのなかで割れたアイシャドウ

五センチヒール

小谷 優 香\*鳥取

しあわせの種蒔きながらそら色のランドセルゆく垣根の向こう  
再就職の夫に選んだオーダーのスーツが凜々しコロナの春に  
三歳が何度も近寄り囁いてへあそぼと誘う微睡の中  
〈咲きました〉友より届きしうす紅のスマホの牡丹にひと日安らぐ  
古稀までは五センチヒールを履きたいと言いついて聞かせている鏡の背な

大人 臭

村上 京 子\*長崎

悪戯な鴉に狙われて気の弱い茶トラ猫ミー尻尾が曲がる  
彼の人はするするやる言うばかりそここ蔓延るくれるくれる詐欺  
加齢臭とどう違うのか大人臭オブラートのちよつと優しい  
抽選会カランカランと鐘が鳴りペットボトルの水二本得る  
退職後足のむくみの無くなりて気分は軽く体重増える

マスクの意味

栗山 貴 臣\*福岡

三時間満員電車に乗らずとも仕事ができるテレワークの今  
通勤で使う時間がいらなくて朝から淹れるドリップコーヒー  
通勤のお供のはずの本たちが在宅の今ページ進まず  
手作りのマスクの意味が変化する 簡単、おしゃれ、予防はどこへ  
コロナ禍を思い出すのはいつになる ずっと続けばその時は来ず

黙して感謝

大久保 ますみ 鹿見島

カーテンを開けば雲間に青空が見えていつも通りのあした  
霰降る寒の戻りぞせつかくの甘蔗の若芽をちぢこまらせて  
このあした夫が干したるワイシャツが竿に揺れをり黙して感謝  
家内に籠るは寛ぎと似て非なる事と知るなりリング食みつつ  
洋食のテイクアウトのチラシ見てそそられてゐる夫よりもわれ

砂の眼

樋田 由美\*三重

べきべきとタンボールの箱開けゆけば甘藷とタロイモ土の香のたつ  
わらわらStay Homeを過しゆめくりめんじやこの砂の眼をして  
「今だから出来る事ある」立ち上がる人々の声嬉し頼もし  
目の前のテレビも夢も液化してゆきそうな夜月に遠吠え  
ダリの描く歪んだ時計に操られ帰る道さえ忘れてしまった

夜空の爽快感

下城 公秀 熊本

空港は雨でも高度一万に来れば四方は日本晴れなり  
雲の上に光あまねし突然の東京日帰り葬儀の機上  
雲の上の雲なき空を仰ぎつつ娘の義母の冥福祈る  
右主翼下方たしかにひかりつつ飛び魚ほどの飛行機よぎる  
飛行機の後尾のトイレにゆまりする夜空の爽快感は格別

を と こ ぎ

水 辺 あ お 静 岡

もらひたる筈二合のぬる爛で酔老となる春の夕ぐれ  
大空にわれには見えぬ境ありひびり啼く空つばめ飛ぶ空  
田に遊ぶ鴨に声かけまた歩くアンダーシャツのほどよき湿り

を と こ ぎ といふ名のすくに折れやすき硬き木ありし昭和日本  
子らのぬめジャングルジムは人のぬめ地球に似たり陽だけが照りぬ

芽吹きに夢中

緒方 真紀子 佐賀

さみどりの山野の樹々はつぎつぎと新芽とがらせ芽吹きに夢中  
青空へ届けといつばい手を伸ばす夏へと続くこのあをぞらへ  
やうやくに蕾を開くアマリスの純白の花夏告げてゐる  
断捨離は五人家族の思ひ出を心に残り物捨てること  
母炊きし空豆御飯のさみどりの大きな大豆よ会ひたし母に

カーネーションの赤

内山 春美\*千葉

コロナ禍に家居の日々は続きいて鯉のほりのごと大空舞いたし  
問いかけにうなづくごとき紫蘭なり細長き首風になびけり  
朝霧にうぐいすの声とよみたり思わず柚子の葉群をさがす  
真夜中の電話のベルに飛び起きる 臥せいし母の逝きてひととせ  
母の日に贈る母なし店先のカーネーションの赤が滲めり

読みかけの本

高橋 陽子\*広島

マスクして化粧せぬ顔隠しつつ幾日ぶりのスパーに行く  
一日に映画二本も観てしまふ今までになき私の日常  
青空に泳げや泳げ鯉幟外で遊べぬ子らに代わりて  
カレンダーの予定一つずつ消されゆき空白になる四月と五月  
どの部屋も読みかけの本積み上げて心はあちらこちらと浮遊す

夢で行きます

高瀬 満由美\*兵庫

長男が話を聞いてくれるだけだただそれだけで今日の生き甲斐

千切りのキャベツの上に卵のせ巢ごもり風かぜの今夜のおかず  
タケノコの弁当持ひらって白毫寺夢ゆめで行きます九尺の藤棚

そんなにも頑張がんぢらなくていいんだよしがみついているタンポポ綿毛  
クマバチは大きい羽音はねね幼こくて山椒の葉陰はなかげにするり隠れる

休校の春 高山 幸子\*三重

外出を自粛する日々珈琲で世界をめぐるコナ、モカ、サントス  
七人の家族に二枚の布マスクどう使おうかまだ届かねど  
たつぷりと墨をふくませ書きたしや五月の空に「生」の一文  
字いもり捕りどじょう追いかけて泥まみれ一年生の休校の春  
麦穂波むぎこひろがる里を散歩する肺の襲襲まで緑を吸いて

春を見送る 安保 コト 岩手

詩歌の森の池の奥なる丘に咲く一叢の赤、真紅の椿  
夫の里の八幡平市田山に「愛の山」あり熊住くまぢみてをり  
今年まだ里に下りたる熊くまの報うらななければ桜をゆつくり眺む  
庭に咲く大樹の桜の枝えだ中にけさ鶯うらのさかんに鳴けり  
桜花さくら咲くも散らふも見たるゆゑ心豊かに春見送りぬ

自粛の空に 磯部 剛\*新潟

終焉の時を待つ母のしずかなるベッドに届く青葉のひかり  
息絶えしわが母の額かぶに口づけす妻の惜別おしべつわれより深し  
わが母の手になじみたる鍬くわの柄えをにぎって立てる里芋の畝  
わがへその曲がり具合は父の臍へそ、牛乳ちで下すは母の腹なり  
ウイルスの現像液げんざうえきに浮き出でぬ真まつ赤あかに錆びた日本の現実  
歌という乗り物ありてわが心ふらりと旅す自粛の空に

光れる魚 池上 昌子 東京

ひつたりと暗き水の裡見えぬまま光れる魚がはつなつを跳ぶ  
こまこまと蘇芳すおうが白く咲く枝に冷ゆる夜風の縁えりが触れゆく  
藻ものいろのみどりの運河うんがの静寂しじやくを破りて浮き来きくろき鶴つる二羽が  
雨あめの日の淡き光ひかりにカレンダーカレンダーをただに眺めてコロナ禍かすこす  
ウイルスの行方ゆくえ分からぬ収束しゆうそくを願ねがひてあふぐ天心てんしんの月

フラワームーン 坂上 靖子 埼玉

ニュースにてひさびさに弾む声流る「今夜は満月、フラワームーン」  
五月の月をフラワームーンと名付けしは長閑ながいそであつた頃のアメリカ  
ころなしかマリーゴールドの花のごとまぶしく光るフラワームーン  
白いドレスの胸の飾りにしてみたし艶あざやかな黄きのジャーマンアイリス  
《四季の里》の団地の角の垣根かきには黄きの薔薇ばらならぶ音符のごとく

母の手 久保 親二\*東京

四人の子育てて母さん逝いきました早世はやせいの父さんほめてやってよ  
父の手ての温ぬるもり知らず生なきた俺おれ細こい母の手て父の手てとして  
母ちゃんお母ちゃんと並ならべば背丈せぢ越こえたよう小五こごの日記にっぴに平仮名ひらがなの文字  
短歌たんか詠よみ花はなを愛あいして寡黙くわもくなる母お母さんのこと今いまも思うよ  
母お母さんゆずりの古ふるき硯いんに墨すみをすり母お母さんの名なを書く命日いのちひの今日けふ

美形の彼 小関 八重子 山形

印鑑いんかんもサインもいらぬと手振りだけで駆け足かけあしでさる宅配宅配の人  
朝あさには含羞くわんしゆうの少女しょうじよ夕ゆふさりて妖艶あやうの熟女じゆくじよ白牡丹はくぼたん咲く  
紫むらさきの藤ふじ・桐きりの花はな、薄紅うすべにの柄え、白しろの朴ぼく、人ひとかけなき山

葉書みてくすつと笑ひぬ顔と字が一致してない美形の彼は  
コロナ禍で世が落ちつかぬつい最近日銀理事に女性がなつたぞ

すかたん 中村 畑 子\*奈良

老二人二メートル離れおしゃべりを返事はどちらもすかたんなれど  
やせ我慢はってわたしは暮らしてる独りぐらしのわたしのきまり  
秋田県三度目に行く計画もやられましたよコロナの悪に  
身を守るためのマスクは四つある出かける時は上等のもの  
灰汁の付く両の手じつと眺めおり 仕事は出来るまだまだ畑の

黄色い小鳥 島 夏 樹\*宮城

籠の小鳥ことことり春の日がながいさびしいきいろいことり



「その二集」特選

上 機 嫌 松 井 奏\*茨城

朝焼けにPS4が照らされて濡れたタイヤの音がしている  
恐怖から65年経った今海の底にある怪獣の骨  
新しくメガネを買って上機嫌家に帰ってカステラ食べる  
弟とわーわーもめてごはん食べお風呂に入りあらもう8時  
友達の子レイな部屋でゲームして家で静かに部屋片付ける

決められた生命線をたどる身は草籠のように老いなど背負う  
褪せた葉の草にかくれてきれぎれのねいろを抱いて枯れてゆく虫  
喉風邪のながら声だしばらくはおれは枯れ木のからす老人  
雲は歌を星は詩を書き風が読む青と黒との習作ノート

五月の空へ 橋本 正 美 神奈川

校庭に教師が一人花見する声かけてみむフェンス越しより  
湧き水で洗へば根まで真つ白き春の香の立つ一束の芹  
休園が続きてゆれることのなきブランコに遊ぶ子雀が二羽  
夏野菜植える畑では人と会ふことなく鶴鶴と幾度も会ふ  
クレイン五機五月の空へ伸びて行きマンションが建つ工場跡地  
葉桜のそよぐこの道ジョギングは折り返し点をチャペルと決めて

愛じゃなかつたら 高 橋 梨穂子\*新潟

本たちは雨音を聴く 図書館は閉館中もこの街にあり  
走馬灯みたい顔を浮かべつつ人づてに聞く友の近況  
百円で買った茶碗がしぶとくて割れない わたしも強く生きたい  
飛びかたを知らないただの絨毯であなたと越えるいくつもの日々  
焦げないほうをあなたに食べさせるこれが愛じゃなかつたらなんだ

元氣出せ我 山口 文\*東京

少しずつ五月の空気の底の方蒸気たまりて梅雨ばいゆうは来たる  
誰も居ぬ学校出勤気楽だと明るく言った後の憂鬱  
引きこもり萎れる我を夫煮るうどんの湯気が浸みてふやかす  
にじみ出るほどに赤いカロチンの滋養を誇るパプリカを切る  
パプリカを刻んで混ぜた卵焼き朝日に浮かぶ元氣出せ我

それが地球だ 渋谷 穂\*東京

妹がひばりを一羽つかまえてそうつとはなつ空は朝焼け  
橙の葉っぱのようにピカピカと爪をみがいて包丁を持つ  
ふきだしのような形の満月に雲がかかれればビックリマーク  
満月がおいしそうだという君の口につめこむサラダせんべい  
でたために時間を合わせた腕時計をたくさん巻けばそれが地球だ  
ていねいな暮らしに合った道具へと腕時計から秒針引きぬく

甲虫標本 今井 智美 福岡

はるかなる沖の闇ごと連れて来て河口を上る夜の満ち潮  
減びゆく予感を持ちてレプリカの地球手に触る科学館にて  
身の丈を寡黙に生きし人に似て甲虫標本鈍く照りをり  
色褪せし『桜蘭』の本ひらくとき心に砂丘のひろがりてゆく  
窓ガラスに自分の舌をこつそりと映してゐる子見られてゐるよ  
石の上で背を伸ばし見る子雀よ見える世界の違ひはどれ程

夢 か 千葉 喜恵\*岩手

早朝の静かなお寺の山門に立つと鎮まる写経会の日

菩提寺の月に一度の写経会ただ筆先に集中の時  
新型のコロナウイルス対策に学校をすぐに閉じると 夢か  
わずかにも浅瀬や中州に芦芽吹き枯草分けて緑表る  
庭の草次々抜いても一平米続きは明日と外出自粛

満点をとる 石田 信夫\*鳥取

手触れたるやわき耳たぶ憶わせる満天星の白きはなふさ  
猛者もさえびをまな板で押さえ調理するわが手に残る生の抵抗  
菜の花も桜も散ってツツ咲く春よそんなに先をいそぐな  
マスクして折節くもるメガネ越しコロナ禍の世の太陽翳る  
魚屋でありし母デイサーピスで筆算、暗算満点をとる

空に鳴れ 内藤 文子 福井

千年のときが過ぎてもあかねさす紫式部は越前の華  
越前の国司となりし父に付き少女の式部はこの地に住みぬ  
古い母と馬鈴薯植ゑし帰り道まぼろしのごと春の虹たつ  
満天星の花の鈴鳴れ空に鳴れ亡き父を呼ぶ風の音ねとなれ  
ただならぬ春を籠れど心の野しんと広げて今を生きたし

コロナウイルス 奥 浩昭 東京

全能の神の造りし天地あめつちを自在に駆けるコロナウイルス  
忽然とわれらが地球に降り立ちて休息知らぬコロナウイルス  
静かなる朝静かなる昼と夜コロナウイルスの統べる地球か  
進化せしコロナウイルス草木くさきをもやがて活動停止に追ふや  
語尾変化に品詞ようごを四つ創り出すエスペラントは希望の言語

点滴終はる

永田 恵美 福岡

藁よりも細いチューブを手の甲からずるりと抜きて点滴終はる  
お互ひに癌で入院する友とおやすみメールを交はしてをりぬ  
他者と私のあひだに白いシュガーポット言葉は砂糖に吸ひこまれゆく  
親を捨て愛に走るを見送りし友の便りもいつかとだえき  
目のあかぬ仔猫は大きな欠伸して五月の昼の時間過ぎゆく

河内 晩柑

福本 郁子\*京都

去り際にふわりと匂うフリージア引き止められて深く息吸う  
はなやかな甘さと夫は表現す河内晩柑が今年も届く  
鯉のぼり泳ぐ五月の夜空には悲しみのひとかけらもなく  
ムラサキが顔のぞかせるてっせんの薔苳える夏めく夕べ  
「ばあちゃん」と呼ばれた人の若いこと 少し離れて振り返り見る

同音異義語

落合 美代子 香川

見るべきは見えて逝きたいといふ想ひ妣に届いてゐるね待つてね  
投げやりし餌を狙ひて急降下鳶の羽音がわが頭上過ぐ



鳶は爪、鷗は嘴にキャッチして餌のあらはたちまちに消ゆ  
辞書開き同音異義語であそびたり思ひ想はず憶へば念ふ  
造り酒屋に酒の試飲をする友ら辛口美味と声揃へたり

ぱたんぱたん

稲吉 裕子\*愛知

清盛の扇を振つて止めてみよ拭ひきれないコロナウイルス  
テロップにながれる地震速報に韓流ドラマが薄れゆく午後  
雨止みて気まぐれ風のおこす音に逐一犬が応へてをりぬ  
ジャズミンに紛れてスクラム組みてゐる屁糞藪をぐいと引き抜く  
ぱたんぱたん心の扉を開閉す何らかはらぬ犬との一日

隠し 庖丁

稲吉 裕子\*愛知

まっ白な錠剤ひと粒白湯に飲み心の安定保つ暮れ方  
床に臥す日の続きいて春いちご今日も食べたり味わいながら  
茶を淹れるとどちらが淹れるじゃんけんであなはいつも負けたふりする  
闘争心すでに失せしを大根に隠し庖丁深々入れぬ

空でも つれる

松本 道代\*熊本

手をとりに話をしたき友なれどこのコロナ禍では電話しかなかく  
真白なる木香薔薇がなだれ咲きとびたつ蝶は空でもつれる  
幸福行き求めた切符いろあせて老いゆくことも運命とせり  
かくれ家の食事処に灯がともるえんま横丁ぬけて左手  
茶畑の新芽の茶葉のまぶしきを摘む機械音移りゆきたり